



**CONEシンポジウム2024  
セッション4**

**今の時代における  
自然体験活動の役割**

20241130

**CONE教員チーム**

**青木康太郎・川嶋直・田中住幸  
中澤朋代・増田直広**

1

1

## **本セッションの概要①**

- **ねらい**
  - 今の時代における自然体験活動の役割を検討するための材料を提供する
- **自然体験活動の今やこれからを知る手がかりを得るために2つの調査を行った**
  - 自然学校インタビュー調査
  - 自然体験活動の現場から大学教員となった人へのアンケート調査

2

2

## 本セッションの概要②

- きっかけは川嶋直実行委員長
  - 自然体験活動の現場から大学等の教員になった人が多い
  - この人達もシンポジウムに巻き込んでいこう
- CONE教員チーム
  - 青木康太郎（國學院大學）
  - 川嶋直（シンポジウム実行委員長、元立教大学）
  - 田中住幸（札幌大谷大学短期大学部）
  - 中澤朋代（松本大学）
  - 増田直広（鶴見大学短期大学部）

3

3

## 自然学校インタビュー調査 調査概要①

- CONE会員団体である自然学校や青少年教育団体のうち12団体を対象にしてインタビュー調査を行った。
- 対象は全国の地方（北海道・東北・関東・中部・関西・中国四国・九州沖縄）や運営主体、運営形態、活動内容などを踏まえて選んだ。
- CONE教員チームのメンバーが聞き手となり、オンラインで60分～90分のインタビュー調査を行った。

4

4

## 自然学校インタビュー調査 調査概要②

### ・調査対象

1. (特非)登別自然活動支援組織モモンガくらぶ
2. (一社)あぶくまエヌエスネット
3. (特非)那須高原自然学校
4. (公財)キープ協会環境教育事業部
5. トヨタ白川郷自然学校
6. (特非)こそだてママnet
7. (一社)をかしや
8. (特非)よみたん自然学校
9. (独)青少年教育振興機構
10. (公社)日本シェアリングネイチャー協会
11. (特非)国際自然大学校
12. ホールアース自然学校

5

5

## 自然学校インタビュー調査 調査概要③

### ・主な質問項目は以下の通り

- ①コロナ前・コロナ禍・コロナ明けにおける取組み、**団体や社会に対するコロナ禍の影響**、②**今後の展望**、③**CONEとどんな協働ができるか**、**CONEへの期待**、④**自然体験活動出身の教員や大学とどんな協働ができるか**
- ・文字起こしデータとAIによる仮要約を踏まえて、要約（500字程度）を作成した。
- ・各団体の文字起こしデータや要約を踏まえて、上記主な質問項目や「今の時代における自然体験活動の役割」について考察した。

6

6

## 自然学校インタビュー調査 1 (特非) 登別自然活動支援組織モモンガくらぶ

- 期日：2024年10月1日
- 話し手：松原條一さん、遠藤潤さん 聞き手：増田
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①自然学校としてのミッションを、人材育成を通じた地域社会貢献と捉えており、その活動を続けてきた。コロナ禍においても自然体験活動の継続に努めたが、参加者数の減少や活動内容の見直しを迫られるなど、大きな影響を受けた。しかし、以前から自然体験活動を通じた社会変革を標榜していたこともあり、大きな影響を受けたコロナ禍をマイナスだけで捉えるのではなく、社会変革の契機とも捉えている。
  - ②養成した指導者が自然体験活動にずっと関わっていけるような環境を整える必要がある。つまり、自然体験活動や環境教育で食べていけるようになることが必要と考えている。また、団体としては活動内容を見直すことや変化を必要だと感じている。
  - ③④そのきっかけとなるのが、他団体や大学、教員などとの協働と考えている。協働するということは、お互いが異なる空気を吸うことによる活性化である。他の団体との連携を強化し、自然体験活動の普及に努めたい。特に、CONEのような全国的なネットワークとの連携を通じて、自然体験活動の社会的な地位向上を目指したい。

7

## 自然学校インタビュー調査 2 (一社) あぶくまエヌエスネット

- 期日：2024年9月27日
- 話し手：進士徹さん 聞き手：中澤朋代、田中住幸
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①団体としては東日本大地震や福島県の原発事故、コロナ禍に大きな影響を受けてきたが、その中で社会や個人の生活における変化を感じ取っている。それを受けて、食の自給自足や地域との共生といったテーマをより重要視するようになった。高齢化や人口減少といった課題を抱える地域において、自然体験活動を通じて地域活性化に貢献している。特に、地元の食材を使った料理教室や、地域住民との交流イベントなどを盛んに行っている。
  - ②元々、食をテーマとした活動をしていたが、コロナ禍を経てニーズが高まり、さらに需要が高まっている。また、社会や個人の意識の変化を受けて、ワーケーション的な取組みや肥料作りも始めている。
  - ③防災意識の重要性の点から、CONEが防災や減災にももっと関与していくべきと考えている。さらに、自然学校のネットワークを活用し、CONEの連携を強化し、社会にポジティブな影響を与える存在となることを期待している。
  - ④地域の過疎化や限界集落の課題に対して、大学や研究機関と協力して地域を活性化する取組みを模索したいと考えている。

8

## 自然学校インタビュー調査 3 (特非) 那須高原自然学校

- 期日：2024年9月27日
- 話し手：真山高士さん 聞き手：青木康太郎
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①コロナ禍でオンライン化が進んだことにより、デジタルコミュニケーションが普及する中で、自然体験活動の重要性について社会の意識が変わったと考えている。同団としては、コロナ禍および町の事業方針の転換を受けて大きく影響を受けたが、その中でも休眠預金を活用した地域内ネットワーク作りや子どもの自然体験活動への支援を行ってきた。
  - ②子どもの体験格差への支援をしたいと考えている。この部分で収益を上げるのは難しいので、企業などから支援をいただくことや、他の事業の収益を充てていくなど考える必要がある。また、若手の人材が活躍できる環境を作っていきたい。
  - ③省庁に訴えることや業界で動くきっかけを作ることを一緒に取組んでいきたい。また、地域内ネットワークの連携や意見交換の旗振りをして欲しい。安全面の質を高めることもCONEの制度を通して協働していきたい。加えて、業界全体の動向を把握することが課題となっている。CONEが主体となって自然学校全国調査を行う必要性を感じている。
  - ④大学の授業を自然学校で行う機会を設けてもらい協働したい。また、有識者としてネットワークで話をしてもらうことや地域外から見た地域の魅力を話してもらうのは嬉しい。

9

## 自然学校インタビュー調査 4 (公財) キープ協会環境教育事業部

- 期日：2024年9月17日
- 話し手：鳥屋尾健さん 聞き手：青木康太郎
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①コロナ禍を経てオンライン化やICT化が進んだことに伴い、オンラインプログラムの開発につながった。また、これまでの活動の教材化や研修を通して、地域とのつながりが強くなった。自然体験活動業界としては、オンライン化により教育の形態が拡張され、地域に関わらず様々な人々に教育の機会を提供できるようになったことがメリットとして挙げられる。それによって直接的な体験の価値が変化することも指摘しており、リアルな自然体験活動の価値が問われるようになったと考えている。
  - ②自然体験活動には、体験格差や気候変動など新たな課題への取組みが求められており、それらへの対応をしたいと考えている。しかし、給与面や教育への投資不足などで自然体験活動の持続性にも課題がある。新たなモデル作りが必要である。森林譲与税の活用や大学と協働しての人材育成などが考えられる。
  - ③④自然体験活動の意義を地域社会の活性化や人材育成と考えている。そのためにも国や自治体、大学などとの協働が必要であり、そこに貢献するのがCONEであると考えている。また、全国的な自然学校調査を行うことの重要性を認識しており、CONEにそのような活動を期待している。

10

## 自然学校インタビュー調査 5 トヨタ白川郷自然学校

- 期日：2024年9月9日
- 話し手：山田俊行さん 聞き手：増田直広
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①コロナ禍と組織変更が重なり、同団体では新たなビジョンやミッションの作成や組織の見直しを行うこととなり、自然学校の社会的な役割が強化された。それらに合わせて、子ども長期キャンプや学生対象のSDGsプログラムを展開している。また、社会貢献活動の重要性と共に地域社会との関わりを大切にするようになった。地域住民との連携を深め、地域活性化に貢献する取組みをしている。同団体では、自然体験活動を子どもの人間形成に欠かせない要素と捉えている。
  - ②前掲の子ども対象のプログラムと大学生対象のプログラム、さらに企業対象のプログラムに注力したい。企業との連携については新たな事業の創出を目指しており、サステナビリティを大切にした社員研修プログラムなど事業が動き出している。
  - ③社会貢献活動としての自然体験活動の意義を発信する際に、CONEという協働パートナーがいることが大きい。
  - ④CONEの取組みの説得力が増すような研究をして欲しい。また、学生の学びの場としての自然学校の利用を期待している。自然学校にとっても人材確保につながると考えている。

11

## 自然学校インタビュー調査 6 (特非)こそだてママnet

- 期日：2024年9月9日
- 話し手：福井さなえさん、芳沢美依さん、大西知芳さん  
聞き手：田中住幸、増田直広
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①コロナ前は主に未就園児の親子を対象とした自然体験活動を行っており、多くの人々に参加してもらっていたが、コロナ禍以降は参加人数の減少が見られる。経済的な理由で参加が難しい人が増えている一方で、教育熱心な家庭の参加増加という参加層の変化などが見られている。
  - ②地域の子育て支援の一環として自然体験活動を提供してきたが、今後オルタナティブスクールの開設を検討しており、幅広い子どもの学びの場を提供していくことを目指している。
  - ③安全講習などCONEやその事業を活用することで質の向上を図れると考えている。しかし、CONEの認知度が低く、団体役員にCONEや自然体験活動に関わる人がいたために活用できた状況である。関西方面においてCONEの認知度を上げる取組みが必要である。
  - ④これまでに教員や環境教育実践者を招いての講演会を行ってきた。そのような協働が自分達の発信の機会となっている。授業として大学生が来たり、サークル単位でボランティアに来てくれたりするとありがたい。教員を窓口<sup>11</sup>に学生に返せることも考えたい。

12

## 自然学校インタビュー調査 7 (一社) をかしゃ

- 期日：2024年9月20日
- 聞き手：菊間彰さん 聞き手：増田直広
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①同団体では、コロナ禍で事業への影響があったが、その間にインタープリテーションに関する書籍を作成したり、オンラインで研修を行ったりと活動を継続した。
  - ②最近海外へ行く機会があったことから、海外でのインタープリテーションプログラム開発や人材育成を考えている。また、民泊事業を始めており、体験をセットにした高単価での展開を検討している。追々大学のゼミの受入れも考えていきたい。四国では防災への意識があり、この分野で自然体験活動を展開することや地域づくりと連動させることが有効と考えている。
  - ③NEALリーダーの資格発行をする研修もしている。資格を得られるのは参加者から喜ばれる。一方、四国では自然体験活動やインタープリテーションへの理解が少なく、自然体験活動の普及が課題となっている。CONEも知られていない状況である。双方の認知度が上がるような協働ができると良い。
  - ④自身は次世代を育てたいと思っており、学生と何か一緒にやる機会があると良いと思っているが、四国では自然体験活動の認知度の低さから実践者が大学教員になることは考えられない。CONEの関係者や自然学校出身が教員をしていることを発信してもらいたい。

13

## 自然学校インタビュー調査 8 (特非) よみたん自然学校

- 期日：2024年9月27日
- 話し手：小倉宏樹さん 聞き手：中澤朋代
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①コロナ禍で団体としては観光活動がストップし、教育活動も一時的に完全に止まったが、感染状況に応じて段階的に再開していった。社会的にはコロナ禍で対面での交流が減少し、オンライン化が進んだことにより、自然体験活動へのニーズが高まったと考えている。また、コロナ禍の影響として子育て中の親の孤立感や子どもの社会性への影響があると考えている。
  - ②森のようちえん事業以上にフリースクール事業への関心が高まっており、子どもの受入れをしている。同分野での人材育成にも着手しており、今後も注力したいと考えている。課題としては、人材不足や地域における自然体験活動の認知度向上がある。
  - ③自然体験活動全体に対しては、NEALインストラクターやコーディネーターの活躍の場を作ることが課題と考えている。フリースクールのマネージャー育成をしたいと思っているのも、この課題につながる。民間がやるのは大変なので、CONEに取り組んでもらいたい。
  - ④学生ボランティアスタッフの募集と育成というつながりがある。実習の受入れをすることもある。今後は効果測定研究面での協働をしたい。

14

## 自然学校インタビュー調査 9 (独) 青少年教育振興機構

- 期日：2024年10月9日
- 話し手：福岡公平さん、石川剛史さん 聞き手：増田直広
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①コロナ禍においては、施設の利用人数制限やオンライン化など、様々な変化が生じた。特に、団体利用においては、感染対策への配慮が求められ、プログラム内容も変化を余儀なくされた。一方で、**コロナ禍を機に、ICTの活用やオンラインでの活動が促進され、新たな可能性も模索されている。**
  - ②学校や青少年団体に加えて、これまでアプローチできていなかった団体も掘り起こしながら利用者を確保していく。また、**地域の特色を活かした地域連携を始めている。**学校教育との連携では、**学校や教員の負担軽減も踏まえた指導・支援の充実に取り組み始めている。**さらに自然体験活動に関する研究を踏まえて、国立の施設としての役割を改めて考える必要性を感じている。
  - ③CONEとの連携では、現状、自然体験活動指導者制度（NEAL）を通じた連携が大きい。**以前は地方施設を会場にしてのCONEの地域フォーラムを行っていた。**
  - ④現在、実践研究事業の取組みの中で、大学や専門機関と協働している。国立の施設として自然体験活動にどのように寄与していくかを考えた時に、**大学や教員、様々な機関とつながり直すことが必要である。****大学等と協働して自然体験活動の効果測定をし、普及に貢献することもできる。**

15

## 自然学校インタビュー調査 10 (公社) 日本シェアリングネイチャー協会

- 期日：2024年9月11日
- 話し手：藤田航平さん 聞き手：田中住幸
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①**コロナ禍で活動に制限を受けたことでオンラインによる研修の取組みやプログラム開発などを通して活動を継続した。**また、全国組織であることを活かして、外遊びや安全に関するキャンペーンを展開した。コロナ明けに事業が動き始めたが、今度は猛暑の影響を受けた。
  - ②今後は、ネイチャーゲームの普及の強化や個人のウェルビーイング向上への取組みをしたいと考えている。また、保育園・幼稚園への自然体験活動の充実に向けた取り組みを強化している。長年指導者養成をしている同団体では、さらに人材養成に注力を使用と考えている。**地域に根ざした活動ができるように、トレーナーの自主性に基づく指導員の研修や交流機会の充実を図っている。**
  - ③**CONEをはじめとするネットワーク団体の呼びかけでキャンペーンやイベントをやりたい。**社会を動かせる声になっていく。また、双方のトレーナー養成のすり合わせにより、指導者養成の連携を強化したい。
  - ④自然体験の効果に関する研究などに協力できる。また、次世代を担う人材育成や自然体験の機会の提供のためにも、**大学との連携が重要と考えている。****授業内外での学生向けのネイチャーゲームリーダー養成講座を行うこともできる。**

16

## 自然学校インタビュー調査 11 (特非) 国際自然大学校

- 2024年9月26日
- 話し手：佐藤初雄さん 聞き手：田中住幸
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①コロナ禍が、自然体験活動に大きな変化をもたらしたと考えている。自然体験活動の対面ならではの学びや交流の重要性が再認識されたと考えている。オンライン化で便利になった一方で、議論の深まりがないことを懸念している。オンラインと対面のメリット・デメリットを認識して使い分ける必要がある。組織としての大きな影響を受けたが、主催事業と指定管理事業とで対応が異なった。自然体験活動全体では、社会の変化の中で自然体験活動に対する危機感を感じることもある。
  - ②今後の活動では、リアルな自然体験活動の重要性を発信すると共に、海外での取組みや多様なステークホルダーとの協働を視野に入れている。課題として、人材不足が挙げられる。学生ボランティアの減少や若手職員の経験不足などがある。
  - ③各団体やCONEにとって、つながりは必要である。その点から今回のフォーラムのようなつなぎ直す活動は重要である。自身の団体にとっても積極的に関わるべきと考える。
  - ④大学と協働でゼミ合宿や実習などいろいろな授業ができると良い。研究者には広く一般の人がわかるような調査研究の成果を出して欲しい。大学との協働を通して、自然体験活動の地位向上や人材育成をしていきたいと考えている。

17

## 自然学校インタビュー調査 12 ホールアース自然学校

- 2024年9月8日
- 話し手：山崎宏さん 聞き手：増田直広
- 要約：①～④は主な質問項目に対応
  - ①同団としてはコロナ禍で活動がストップし、教育旅行が停止し経営に大きな打撃を受け、若手スタッフのスキル向上の機会も失われるなど大きな影響を受けた。しかし、この間に経営の見直しや地域でのつながり直しなどに取り組んだ。コロナ禍は自然体験活動に大きな変化をもたらしたが、その重要性に対する社会の認識が変化した（高まった）と考えている。
  - ②拠点が各地にあるが、組織マネジメントを中央集権的にせず、各拠点でまじめに考えて取組むようにしている。その際に団体単体ではなく、連携のハブになることが必要であり、今後も大切にしたい。また、自然体験活動は、レクリエーションを超えて地域社会の活性化や生物多様性保全につながるものと考えており、そのモデル作りに取り組んでいる。企業研修にもさらに力を入れていきたい。
  - ③CONEに対しては、視野の広いメッセージを発信することを期待している。CONEがハブとなり「今現在大学の先生で、自然学校との相性が良さそうな人」を引っ張って欲しい。
  - ④大学や教員に対しては、自然体験活動の効果の科学的な検証を期待している。自然学校のことも地域経済のこともわかっている人材がいると良い。

18

## 考察

### ①コロナ禍の取組み・影響

- ・ マイナス面
  - 団体として
    - ・ 経済的ダメージ
    - ・ スタッフが経験を積む機会を失った：スタッフ=人財という表れ
  - 自然体験活動全体
    - ・ 体験の機会が失われた
    - ・ 自然体験活動業界へのダメージ
  - 社会全体
    - ・ コミュニケーション不足

19

19

## 考察

### ①コロナ禍の取組み・影響

- ・ プラス面
  - 団体として
    - ・ 経営・運営面の見直し
      - オンライン化による集中と選択
      - スタッフトレーニングの機会
      - 地域とのつながり直し
    - ・ プログラム開発、これまでの取組みの資料化
  - 自然体験活動全体
    - ・ 自然体験活動の再認識、再価値化=リブランディング
  - 社会全体
    - ・ オンライン化、ICT化
    - ・ 価値観の転換、ライフスタイルの変化
      - 自然体験活動や環境教育はこれらを促すものであったが<sup>20</sup> コロナ禍により促進された

20

## 考察

### ②今後の展望

- 地球環境問題への取組み
  - 気候変動
  - 生物多様性保全
- 社会課題への取組み
  - 災害対策
  - 体験格差
  - 子どもの体験不足
  - 子育て世代への支援
  - 価値観の転換：ワーケーション、農的暮らし
- 地域社会課題への取組み
  - 持続可能な地域づくり
  - 地域内ネットワーク作り

21

21

## 考察

### ②今後の展望：自然学校の課題

- 自然学校の持続可能性
  - 経済面
  - 人材不足
    - 学生ボランティア
    - 職員
- 自然体験活動の意義の周知
  - コロナ禍で再認識・再価値化された意義の周知
    - 直接体験の意義
    - 人を育てる
    - 防災教育
    - 持続可能な地域づくり

22

22

## 考察

### ③CONEとの協働、CONEへの期待

- 自然体験活動の存在意義の向上
- 自然体験活動に関するメッセージの発信
  - 新たなリスク
- 地域支援
  - 自然体験活動の存在意義の向上
  - 被災地支援
- 人材育成・人材の活用
  - 自然体験活動指導者認定制度（NEAL）
  - 安全講習
  - 育成した指導者の活用

23

23

## 考察

### ④自然体験活動出身教育や大学との協働

- 教育
  - 自然体験活動指導者による授業
    - ゲスト講師として、非常勤講師として
  - 自然学校での授業
    - 合宿、大学教育に組込む（単位取得）
  - 人材育成
    - 学生ボランティアとして、自然学校としての人材確保
- 研究
  - 自然体験活動の意義
  - 自然体験活動の効果検証

24

24

## 総合考察 今の時代における自然体験活動の役割

- 人材育成
  - 自然学校の人材育成
  - 社会における人材育成、次世代育成
  - 多様な学びの場の創出
    - ・自然保育、森のようちえん、フリースクール、オルタナティブスクール
- 協働取組み
  - 主体として
    - ・協働先：省庁、自治体、企業、学校教育（子ども対象・教員対象）、大学、地域、海外
  - コーディネーターや中間支援組織として

25

25

## 総合考察 今の時代における自然体験活動の役割

- 防災対策への取組み
  - 防災教育、災害教育
  - 自然学校ネットワークによる相互支援
- 新たな取組み
  - 経済面：休眠預金、森林譲与税
  - 人材面：大学との連携
  - 生活面：ワーケーション、半自然学校半X

26

26

## 総合考察 自然学校の公式の変遷

- 自然学校の公式（広瀬、2011）
  - 自然学校＝自然体験活動＋社会課題への取組みと貢献
- 『ESDの地域創生力と自然学校』（阿部・増田、2020）
  - 自然学校＝自然体験活動＋**地域**社会課題への取組みと貢献
- 今回の調査から
  - 自然学校＝自然体験活動＋**多様な**社会課題への取組みと貢献
    - ・地球環境問題、社会課題、地域社会課題

27

27

## 総合考察 自然学校運動

- 自然学校運動（西村、2013）
  - 「自然学校は3つの課題を背景に生まれた運動」
  - ①現行の教育に対する課題、②持続可能性への課題、③地方と都市への課題
- 今回の調査から
  - 地球環境問題の進行やコロナ禍、SDGsを受けて課題への取組みが多様化
    - ・①自然保育・森のようちえん、フリースクール、大学教育、体験格差
    - ・②地域から地球まで、食、SDGs
    - ・③ワーケーション、農的暮らし

28

28